

はじめに

臨床医の先生から「病理の重要性はよく認識してはいるものの、なかなか病理を勉強する機会がない」という声をよく聞きます。まとまった時間をとって勉強するには忙しすぎるし、また直接病理医から説明を受けて勉強したいと思っても、自分の持っている病理知識に自信がないため“簡単に聞きに行くほどの勇気がもてない”ということのようです。多くの病理医は、臨床医が質問に来てくれることを歓迎しているのですが、一方で「病理医の説明の意味を最低限理解するための病理学的知識を持っていけると、話もスムーズに進むのに」と思っていることも事実です。その最低限の病理学的知識を身につけるためには、ちょっとした“コツ”が必要であり、本書を通してそれをつかんでいただけたらと思います。

本書は2013年8月に発行され、現在も好評を博している『臨床医が知っておきたい消化器病理の見かたのコツ』に続く第2弾として企画されました。構成は同じで、1症例を見開き2ページにまとめ、忙しい時間の合間に気軽に勉強できるようにしてあります。

左ページに簡単な臨床経過、胸部画像と診断に重要と思われる病理像を提示して、病理像をみた臨床医からのよくある疑問を「臨床医のギモン」として記載しました。右ページには病理診断を行うために知っておきたい所見を写真内に矢印や囲みなどを入れて、病理組織像の理解を容易にするように工夫してあります。解説文や「+α知識」にはその疾患についての必須事項を列挙し、右ページの「臨床医のギモン」の答えとなる部分にはアンダーラインが引いてあります。最後の「キモの一言」は、疾患について“是非とも知っておいて欲しいこと”、“知っているるとちょっとカッコイイこと”を書いて、まとめのかわりとししました。

紙面構成

臨床経過

胸部画像
+
重要な病理像

臨床医のギモン
※答えは右ページの
下線部



矢印・囲みを使って、注目すべき部位をわかりやすく図示

キモの一言

左ページの胸部画像は、原則として呼吸器疾患の診療で基本として行われている胸部X線写真とCT写真に統一しました。統一した理由としては、放射線画像でみられる所見が病理像としてどのようにみられるかという点が臨床医にとっては最も興味のあることの1つと考えられるからです。放射線画像と病理像の関係が一番よくわかるのは切除肺の肉眼像やルーペ像と対比することであり、その後に顕微鏡下の組織像へとつながっていきます。本書内には切除肺の肉眼像やルーペ像の写真が多数登場しますが、これも本書の特徴の1つと考えています。

また、本書は呼吸器科医（後期研修医〜）を対象として企画されたのですが、ところどころにかなり稀な疾患が含まれています。しかしながら、稀な疾患であるために臨床像と病理像を対比してコンパクトに記載した成書（特に日本語で書かれた成書）はこれまでに見当たらず、もしもこういった疾患に遭遇したときにこそ本書が大きな威力を発揮することは請け合いです。

本書はベテランの呼吸器科医の先生にも十分読み応えを感じていただける内容と考えています。放射線科医、病理医、メディカルスタッフの皆さんにとっても有用な情報をちりばめたつもりですので、多くの方々に愛読していただくことを願っています。

最後になりますが、企画の段階から完成まで忍耐強く対応していただいた編集部の鈴木美奈子氏をはじめ、羊土社の皆様に心から感謝いたします。

2015年4月

編集者を代表して
清水禎彦